



本誌の特色

本誌は全國鐵道の停車場に備置
 きあれば其廣告は全國の公衆一
 般に知らるゝ便宜あり

聖訓

何なる月日ありてか無一不成佛の御經を持たざらん昨日か今日になり、去年の今年となることも、これ期する所の餘命にはあらざるをや、凡そ過ぎにし方を數へて、年のつもるをば知るといへども、今行末に於て片時も誰か命の數に入るべき、臨終已に今にありとは知りながら、我慢偏執名聞利養に着して、妙法を唱へ奉らざらんことは、志のほど無下に

○宗門の教育に就きて(完結)	釋月生
○擲筆の辭に代ふ	國友文次郎
○日什大聖人置文誦誦章(第十七回)	阪本日桓
○宗教を論ず(完結)	勝水淳行
○文學の變遷	△ △ △
○日蓮上人の種族觀	小倉樗哲
○約教の勝劣	憲 洪 院
○俗間傳説の日經上人	小倉樗哲
○學生と宗教	良惠綠汀
○滿洲の宗教	三上翠生
○統一を讀む	金山猪助
○雜報數件	
○廣告數件	

本號目次

宗門教育に就きて(承前)

統

釋月生

二、一定の註解を作りて、必ず之によらしむべきか如何。是れ從來成立宗教に於て執られたる方法にして、其可否如何を決するは容易の業にあらず。

抑も人心の發達は、獨斷、懷疑、批評の三時代を經過して、漸次進歩發展するものなる事、既に疑ふべからざるが如し。即ち、人生れて小學時代より、中學の三四年。年齢を以てすれば、七八歳より十五六歳、乃至二十歳位に至る間は、外界の現象に對して一も疑ふ事なく、獨斷を下す事容易なり。又社會の制裁、長上の命令に對して、慎重なる考察を経ずして、妄りに甲は甲なりと云はるれば、之と信ず。故に是時期を又妄信の時代とも稱しうべし。識漸やく高く、見聞漸やく進み來り、外界の現象は必らずしも教場に教られしものと一致せず。一切の事物亦必らずしも且て斷言せし如くならず。加ふるに事志と違ひ、物意の如くならざるを見るや人を疑ひ、天を疑ひ、遂に一切を擧げて之を懷疑界裡に葬り去らんとす。二十歳前後の青年に往々見る所のもの即ち是れなり。

懷疑時代に繼いで來るものは批評時代なり。煩惱憂苦食を絶し、眼を廢すると雖も、遂に死に至らざるよりは、彼に何等か一定の見解を求めて、之により、以て處世の感となさんとす。然れども、其依りて以て立脚地となさんとすものが、無限絶大に根據を有せざるや、彼は復之を疑ひ、再び信仰に入る。要するに、批評時代は一種の信仰によりて、百般の事項を批評し去ると雖も、時ありてか之を裁理し能はざるや。再び疑問に入り、かくて信仰(或は獨斷)と懷疑との中間に彷徨するものなり。

心理的研究の盛ならざりし時代にありては、人々謂へらく、只教育によりて以て人は之を徒すを得べしと。されば頑迷保守的傾向を帯び來らんとする宗教にありては、人心發展の自然的要求をも、將た彼がよく宗教的稟賦を有するや否やをも見ずして、之を強うるに教義を遵奉し、經典を格守せん事を以てす。嗚呼、又誤まれるの甚しきものならずや。共に天地の氣に孕まれ、雨露の恵に化育すと雖も、梅子は遂に梅となりて、嚴寒に芳薫を放ち、椰子は終に椰となりて、丁々として天に冲す。元と是れ天賦なり。人力の如何ともする能はざる所。骨肉の親と雖も、稟賦を異にすれば、一は東に飛び、一は西に走らざるを得ず。萬人を律して同一典型のもとに一括し去らんとす。國君の權を以てするも得べからざるなり。

翻つて今日の宗教家養成。換言すれば諸宗に於ける寺院住職の教育に見よ。彼等の多くは「デモ坊主」にあらざれば「カラ坊主」なり。食へないから坊主にでもしやう。坊主の子だから坊主にしよう（特に眞宗）と云ふ。疑もなく、彼等の或者は、百姓が鋤を取り商人が算盤を手にすると同じ意味に於て、將に食はんが爲めに經文を讀誦し、禮拜を行はんとす。淺間しき限りに非ずや。彼等の心中焼ゆるが如き傳導の誠心あらざるなり。否夫子自らに於てすら自己はやかて何をなすべきかをさへ自覺せざるなり。要を探りて之を云へば、彼等は、實に親の都合や、社會在來の風習や、總て外的原因によりて、僧侶となるべく餘儀なくせられしものにして、内求道の精神に驅られ、外一切衆生の火宅に沈淪せるを救済せんどの大勇猛心ありて、僧侶となれるものは殆ど曉天の星の如く罕なり。否、一人も是れあるなし。されば破戒無愆の僧侶として、日に新聞紙三面の材料となるもの、誠に當然の勢と云はざるべからず。其、適々殊勝らしく本堂の掃除を行ひ、檀信徒の法要を行ふものは、其の年齢と、法衣の鉢面とに制せらるゝ所のものなればなり。余輩の言辭を以て、漫りに過激奇矯を喜ぶものとなす勿れ。現に十幾萬の僧侶一人として生靈問題に焦心するもの無しと云ふも殆んど誤らざるなり。然れども、是れ寧ろ當然なり。かくあるべくしてかくありたるなり。嗚呼、壓制教育の結果、亦恐ろしからずや。宗教家

たる素質を有せざるものを驅りて、強いて經を取り、法衣を纏はしめんとするや。徒らに遊食の民を製造するのみならず。其罪延いて恐るべき結果を來し、天下を茶毒する將に計るべからざるものあらんとするや、譬ば上述の如し。復、更に今日の青年僧侶の學に就けるものを見よ。彼等の中、時に或は學力優等、品性亦勝れたるものありし雖も、平均するに官公立の生徒に及ばざるものあり。中學程度の學校を卒へ、稍高等たる教育を受けんとするや、其派内に高等學校の設けあるにも係らず、事狀の許す限り、去つて官立の高等學校、或は大學に遊ばんとす、是れ抑も何等の現象や。思ふに卒業後社會に於ける地位名望の此と彼と異なるなり。就職の便、不便、此と彼と異なるなり。種々社會的状況の原因をなすもの多しと雖も、今日宗門に於ける教育制度の甚だ不完備なると、其根本的精神に於て缺如たるものありて存するに非ざらんばならず。加ふるに、學生の十中八九は前に云へる如く、宗教的稟賦を有せざるものなり。不完備極まる制度に以てするに、此不適當なる種子を以てす。恰も北天荒蕪瘠涼の土地に植ゆるに、南天肥沃の土壤に非ざれば繁茂せざる草木を以てするに似たり、収獲の多寡、智者を待ちて初めて知るべきに非ず。嗚呼、今日の宗教教育の有様、實に斯の如し、貧弱なる財政を有し、少數の末寺信徒を有する宗派と雖も、苟も一宗派を形成する以上は、何等か其宗専門の

學家を有せざるは耻辱なりとて、變則的十八世紀的學林を設くるもの、一二にして足らず。是れ豈其宗の爲めに執るべき政策なるか。將に攻究すべき問題ならずや。

六

余輩は前節に於て、本問題を離れて岐路に立入れるが如し。然れども一宗教が眞に其宗の興隆を企圖し、以て上は宗祖の遺風を傳へ、下は萬民心靈の問題に資するあらんと欲せば、漫りに玉石相混じて同一典型を作るを止めよく宗教的素質を考へて、之を發展せしめずば、徒らに多大の費用と、多大の勞力とを費やすのみにして然も其買ひ得る所のもの依然たる御住職様や、墓の番人に過ぎざるべし。

若し夫れ宗教的資質を有するものにして、之に加ふるに宗教的教育を以てせんか、區々たる註解豈之を論ずるの要あらんや。註釋を作りて之によらしめ、先人の所説に盲從是れよらしめんとするは、畢竟被教育者に宗教的素質あらざるが爲めのみ、茲に於てか問題として掲げし所のもの遂に問題たる程のものにあらざるを知る。要は宗教的素質なるもの、之を以て布教傳道に當らしむべく、其是が準備として所要の教育を施せば足る。然れども、此事たる云ふべくして殆んど實行し得られざる事なり。人誰れか彼が有する偉大の先天的稟賦を洞察し得んや。是に於てか、止むを得ず僧侶の子弟を教養するには、先づ

七

一定の註解によらしめ、傍ら子弟をして宗教的經驗を積ましむるを要す。自己の經驗と、宗義に關する學識の進ひや、彼は懷疑に陥り、開いては批評の時代に進む。而して此懷疑に陥れる時は最も注意すべき危期にあるなり。彼は佛を疑ひ、經を疑ひ、從來の風俗習慣を疑ふ。況んや教祖の註解をや。況んや先師の教訓をや、此危期に於て或は之を外道として放逐せんとし、或は之に加ふるに肉刑を以てし、破門を以てせんとせしは、從來の教育の有様には非しか。嗚呼是れ人心自然の傾向を知れるもの、所爲ならんや。斯くの如くして氣骨あり氣概あるものは去つて無神論者となり、或は彼等が罵しりし如くに眞の外道となり了らざるもの、十に一二もあるなし。其唯々として形骸を止むるものは、多く是れ無氣力爲すなきの輩に非れば、外、人を欺き、内、心に背きて一時を彌縫するものならずんばあるべからず。斯くの如きものを驅りて以て宗教教育の能事畢れりとなすもの、比々として然り。宗教の勢力衰へざらんとするも豈得べけんや。然らば即ち此危期に對する所置如何。余輩は更に節を改めて卑見を陳せんとす。現時の弊風に藥するを得ば、亦幸なり

山野に放浪して人煙を知らず、群獸を叱咤して奔放度なきもの、只其本能に任じて暴戻爲さるる所なきものと雖も、之に嚮し、之に餌食を與へ、啓導誘掖力めて馴致せしむれば、

或は荷物を負いて遠きに行き、或は人の能はざる所よく之を爲す。其職類たるに於ては異なるなきも、何ぞ其野に放流せる時と、此物と、異なるの甚しきや。斯くの如く、殆んど一見して、彼と是とを區別し能はざる迄に變化せしめ得しもの一に啓導誘掖の宜しきを得たるによらずんばならず。翻つて若し教導其宜しきを失はんか、天然に放任するよりも、却て悪き結果を生せん事十の七八ならん。彼の角を矯めて牛を殺すの類、即ち是れなり。

生涯の危期に陥れるものに對して徒らに鞭撻を事とするは蓋し物の本性を知らずして而も之を我が思ふ所のものになさんとするに等しく、實に人性を侮辱するの甚しきものなる事は、既に論せる所の如し、壯者、尙時に先達之士の注意を待たずんば、思はざる邪路に蹈み入る事あるべし。況んや、病者に於てをや。一日之が啓導を誤れば、千里の失策を生ずる亦是なきに非ず。

而して其是を啓導し、誘掖せんには、能く彼が病根のある處を究め、足らざるは補ひ、曲れるは正し、或は鼓舞し、或は慰諭し、只管善に向つて之を導かざるべからず。若し夫れ教導其宜しきを得んか、獨り其者の幸福のみならず、彼は進んで能く自己の天職を悉し、宗教家たるの自分を全うすべし。世の僧侶教育に任せるもの、一に此點に對して注意する處なかるべからず。徒らに祖風の擧らざるを嘆じ、宗門の革新を

欄筆の辭に代ふ

國友文次郎

去年法華諸異本の研究を再びして已來既に十閱月、先に研めし處と併せて、少しく結果のまとまれる者あり、普く天下に問ふて、我が研究の當否を決せんと欲し、即ち昨年来誌上に連載して僅に所懐の一小部を発表し、更に進んで幾多の問題を呈供し、幾多の批判を試みんと期したりき。

初め余輩の之を公にするに當りてや熟慮少時、或は經意を傷けざるやを考へたり、るが結果は先に發表せしが如し、余輩意を決してこの稿を起すに當りては、又何等の念ふべきなく、あくまで論じくして悉くこの疑問を評論せんと決意せり而も余輩四處、經意に就ては期へしも、宗學者に向つては思ふ處なかりき、いか計り彼等の頑迷固陋にして、又いか計り無學短才なるやを知らざりしなり、然り、彼等は實に三五の末書を暗誦せるに止まれるのみ、斷乎として活學者には非ず、かくの如きの徒、いつの世にも多くして、もし意に之を介せば何等の言論をも敢てし得ざるべしと雖も、又時に彼等の有せる勢力をも顧念して、彼等と戦ひ、彼等を屈すべき時機を勘ふるも、決して徒勞に非ず、余輩は儘かに時期ならぬ時にこの稿を發表せんと試みき、彼等は實に戰を初むる丈の智識もなくして、唯徒らに天魔外道の暴言を敢てせるなり、

唱へんは、余輩の與せざる所なり。一宗の振不振は、其派内に健全なる傳導者を有するの多寡に依る。健全なる傳導者を得んには只教育の法其宜しきを得ん事を勤めざるべからず。かくの如くなれば、一の改革も是を要せずして、よく祖風を宣揚し、民心を啓導するを得ん。

傳導家布教師にして健全なる思想を有し、宗教家たる事を自覺せんに於ては、豈區々の注解によらしむるを要せんや。將た又注解によらしむるとするも、其結果毫も危險なる事に及ばざるは、明なる事なりと云ふべし。

凡そ何れの職業と雖も、人格完成は彼が社會に出づる第一歩に於て先づ力むべき事なり。然り而して宗教家に於て特に然りとす。是れ抑も一切の根本問題なり。此點に於て間然する所なくんば、自餘案々の事、恰も斧を以て木に對するが如く、將た明判官の疑獄を斷するが如く易々たらんのみ(畢)圖らずも長文となれるもの哉。而も思ふ事未だ半ならずして、紙數既に豫定に越ねんとす。思ふに宗門教育に關する問題は實に廣汎にして、到底一朝一夕に盡さるべきものにあらじ。余は復改めて更に機を見て論ずる所あるべし。匆率しきものを加へたるが如し、罪を讀者と編者にと得るもの少なからず、乞ふ、諒焉。又云ふ、譬峰と稱月とは別人に非ず、記して責を明にす。(二月十五日)

既に此の如し矣、もし余輩の研究にして一少部分なりとも彼等の耳目を驚かしなば、その驚激は果して如何計りなるべき余輩はつく／＼と無益の戰端を開いてけりと悔ふる處ありぬ戰の結果は全然無益なるべきなり、否無智の徒漫に雷同を敢てして、遂に救ひ得べきをも救ひ得ざるに至らん、稿は既になれり、急いで益なきに發表するの要なし、余輩は時期を過りぬと、幾度か悔ひ、幾度か悔いぬ。

偶々本誌組織變更の事生ずるあり、滿二載に亘るべき余輩のこの稿は、幸か、將た不幸か、いかにしてもその餘白を見出し能はざるに至りぬ、欄筆の外なきのみ、普通ならば簡單に所懐の慷慨を連ねて以て諸君に報ふべきなれども、余の悔ふる所既に前に述ぶるが如し、簡單ならは一層正解せられざらんか、斷然余輩は時期の至るを待たんと決したり、維新前の遺物は久しからずして、その跡を絶つに至らん、乞ふ暫く余輩に休暇を與へよ

明治三十九年二月統一組織變更の議決せし夜に

『予の法華經觀』の一節

其 一

會て公にせられたる幾多の法華經觀を通覽するに、その見解に淺深廣狹の別こそあれ、法華に賛する者も、法華を否む

者も何れも同様に佛教を統一し、調和し、發揮し、併呑せんとしたるものとして法華を見ざるはなく、又曾て佛教に對して何等かの意見を懷抱したる幾多先人の所論を見るに、凡てその影響を法華に被りしが如く、僅に小乗教を除いては、先づ法華經觀を樹立して然る後にその佛教觀を定むるを以て常規となし、從つて法華に對する見解の如何は直ちに以てそれが所論の價値を定むべき試金石なりと云ふべく、法華を顧みざる佛教論の如きは元より云ふに足らず。歴史を見るに弘法の眞言、法然の念佛等子細に觀察し來らば、凡てそが一種の法華經觀にして、この他光宅の義記、嘉祥の玄論、慈恩の玄讚等いかに法華が佛教達觀の指針となれるかを知るべく、現代に於ても村上專精氏の統一論の如きは漸々法華に接近して其の歸趣を求めんとしつゝあり。此の如く法華の重視せらるゝ所以は蓋し法華が大藏の中心にして、又歸趣なるに由るに非ざるか、余は法華經を以て佛教特性の發達し來りし最後の解決なりと信ずる者なり。

其二

佛教とは實にこの迷悟生佛の關係を出てずして教行理は詮ずる所佛陀と吾人との間に要する媒介者に過ぎず、迹門に於て發展の頂上に達したる人開會の妙旨と、本門に於て更に發揮せられたる果法光顯の妙談とを捉へて、直ちに是を佛教の眞髓、その本質、その全体なりと云はんに、誰か復是を否む

ものあらん、實に一代佛教はこの因人と果佛との關係に就て燦然として一大深遠巧妙の議論を喚發したりし也。

日什上人置文諷誦章卷上

齡八十老比丘 阪本日桓 講述

增田聖道 速記

其十七

引不輕大士之往事、舉而強毒之逆緣、顯逆即是順之圓意、此の三句廿三字は法華經本門の常不輕品の大意を述べたる文で有ます。諸法師功德品の次に此御品を説せたる來意は上の分別功德品及び隨喜功德品の二品に於ては觀行五品の外凡の行人の因の功德を説き又た法師功德品に於ては相似六根淨の内凡の行人の果の功德を説いて滅後の流通を勸導遊ばしましたるが是よりも一層能き勸導は往昔の常不輕大士が此の法華經を尊信して不惜身命に法華經を流通し其功德によつて現在に於て相似六根清淨の内凡の果の位に昇り順次に後生に於ては見佛聞法の功德を得たる先證の確乎なる證據を引いて滅後の流通を勸導するが能き順序の勸め方なりとて法師功德品の次に此の常不輕品を御説になつたて有ます。此の三句廿三字の文を分て釋しますれば三段の法門となり有ます。初の一句八字は法華經能弘の導師を明し次の一句七字は所化の人

を擧げ末の一句八字は所弘の法華經の功德を明したる文で有ます。○引不輕大士之往事、此文の本文の不輕大士の往事の事を極略して辨して聽せませう。此御方は乃往過去の世に此娑婆の内の大成國と申す國に威音王佛と申す佛が御出現なされ權實本迹の御經を説せ給ひ一切衆生を濟度し畢て御入滅の後正法を經過し像法の中に一人の法華經の行者たる大士が有ました。御名をば常不輕と申しました。此の常不輕菩薩が不惜身命に他宗權門の比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆の人の誹謗正法の大罪を折伏して我、深敬、汝等不敬、輕慢、所以者何、汝等皆行不善、薩、道、當、得、作佛、と此の廿四字の御題目を自ら信念口唱して他宗謗法の人に勧めました。其所以他宗權門の四衆の族が瞋恚を發し杖木瓦石を以て打擲し四支五体血に塗れ頭のギリ／＼より足の爪先に至るまで數多の傷を負せ給ひたれ共本より覺悟の事なれば毫も恐る心なく退く心なく終身上に辨した廿四字の御題目を御弘通遊はし衆生濟度致しました。御名を常不輕と申されたは他宗權門の増上慢の四衆の人が惡口して付けた名であります。其譯は此の菩薩の常に口唱し玉へる廿四字の御題目の中に不輕輕慢と有ますから他宗の増上慢の族が惡口して又不敢輕慢の坊主が來やがつた小五月蠅惡な坊主じやと始終申したから遂に常不輕と云ふ御名になつたて有ます。此の菩薩は法華經の御題目を御弘通遊されし大功德によつて現世に於て相似六根清淨内凡の果の位に昇り順次生の未來

世に於て法華經弘通の大功德に隨へて二千億の日月燈明佛に値ひ奉り又た二千億の雲自在燈王佛に値ひ給ひて種々の大功德を得て法華經を弘め一切衆生を濟度して疾に佛道を成就遊されたて有ます。彼の過去の不輕菩薩は今の本佛の釋尊で有ます。其時代の他宗權門増上慢の比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆の誹謗正法の人々は今の法華經所説の會座に列なりたる跋陀婆羅菩薩等の五百人の大士師子月等の五百人の比丘比丘尼思佛等の五百人の優婆塞優婆夷が此の法華經の會座に於て得三菩提の利益を得て不退轉の位に登りたる人々が其れて有ると釋尊が御説になつたて有ます。是れが今の諷誦章の不輕大士の往事と申すて有ます。委くは法華經文句同記の不輕品の卷を披て御覽なされよ。○舉而強毒之逆緣、文倍此の文に就ては釋尊の御化導から辨しなればなりません。今の釋尊が世に御出現になりまして四十餘年の間脚躡して容易に此の法華經を説いて本來過去世におゐて此の大乗の法華經に厚く縁を結びたる本結大縁の衆生なれば此の結縁の善機を書ぬやうに將護し給ひて其機の淳熟して成佛の果を得る時の至るを待ち給ひたるので有ます。其所以釋尊が擬宜と申して華嚴の大乗をあてがつて見たければ、更にも更に其機なれば、今度は誘引とて鹿野苑に行き給ひて小乗の四阿含經を説きて空を證して誘引しぬ夫れから彈訶とて方等經を説いて證空の大に不可なる事をお叱り

になりました其所で此の彈詞によつて廻心向大の悔悟の氣味が見えましたから今回は淘汰として般若經を説いて虚空の穢心を淘汰せしめ醇々然と次第を亂さず教化して本結大縁の善機の淳熟するを待たせ給ひたるがゆえに四十餘年と申す長時間を経過して後に法華經を説いて佛果を得せしめたる有ます其所で今の本文にお書になつた不輕菩薩は世に御出現になるやいなや時日を移さず直に此の法華經を説いて衆生を教化なされました其所以は此の御方の所化の衆生は本未有善と申して本來過去世に於て大乘の此の法華經を毫も善縁を結びたる事なき衆生なれば設令法華經を誦誦せずとも本來無善作惡の衆生なれば必定三惡道へ墮在すべし左すれば寧ろ法華經を説き聽せさせて誘せさせ其誘法罪によつて惡道に墮るといふと云ふも一旦法華經を耳に入れて佛種を下ろし結縁したる功德によつて惡道より出て、更にまた法華經を説き聽かせ信仰致させて成佛の利益を得せしむるには加じとて而も強て法華經を以て之れを毒したり譬ば人ありて大地に墮て倒れまた大地に手を杖て立つと同様な者て誦誦正法の罪によつて惡道に墮ち復た正法結縁の功德によつて惡道より出て、成佛致しませす因縁隨惡必由三得益と釋したるは此の事て有ます右の次第のへ不輕菩薩は毫も權教を説かず但令用實して直に法華經を御説になつたて有ます吾宗祖大聖人の御出世の時も不輕菩薩の御出世の時如く世は五濁亂漫にして所化の衆生は

本未有善の機なれば不輕菩薩の事蹟を紹繼して念佛無間等の四個の格言を立て諸宗を折伏し法華一經の成佛なりと但令用實而強毒之の御弘通なされたて有ます前に於て辯じました通り誦誦正法の逆縁の功德を以て無善作惡の墮獄の衆生を救済し給ひたる大慈大悲の御弘通て有ます今の願誦章の御文は此御弘通の事を御書になつたて有ます○顯三逆即是順之圓意一此の一句八字の文の意を辨じて聽せませう逆と申すは道理に背く事て順と申すは道理に隨ふ事て即是と申すは取も直さずと申す語て圓意と申すは法華圓頓の妙法の意味と申す事て有ますそれは何いふ譯て有るかと申すに不輕菩薩と申す法華弘通の行者が各宗の比丘比丘尼と申す出家の人と優婆塞優婆夷と申す在家人の増上慢の四衆の者どもが爾前無得道の四味三教の方便權教に執着して法華圓頓の實教を誦誦する諸宗の逆縁の機縁に對して厭がる法華逆門の開權顯實十如實相理の一念三千の妙法を強て説て之に毒して法花經に遠縁を結ばしめ佛果の種を四衆の人々の心に下しなしたよつて誦誦正法の他宗の族か迷情の耳には逆ふといへども其の誦誦正法の心性の隨順しまするが故に逆即是順之圓意と御書になつたて有ます逆即是順なれば即身成佛しさうなものなれども左右は參りません一旦誦誦正法の逆縁の人となりたる上は墮獄の惡因を造りたれば三惡道へ墮在致します又誦誦正法の人なれ

ども不輕菩薩の教化に順以捨邪皈正して法華信仰の行者となりたる順縁の御弟子檀那等は即身成佛する善因となるので有ます是の如く逆縁の人となれば墮獄し順縁の人となれば成佛して順逆の二道が格別のやうに思はれますが決して格別の者ては有ません如何となれば誦誦正法の他宗逆縁の人々の身軀に無始より實相妙法の理が具足して有ます誦誦正法の逆縁のとき取も直さず本具の實相の妙理に薰陶し順しまするから逆と順とは同時にして決して前後の差別有るものてはありません故に逆即是順之圓意と御書になつたて有ます是れは之れ不輕菩薩の法華逆門の開權顯實理の一念三千の妙法御弘通に約して辯じたるて有ます例せば吾宗祖の佐渡左遷の法難已前の御弘通と同一の事て有ます○吾宗祖大聖人は法華經本門弘通の大導師なれば逆即是順之事圓を顯すと云はねばなりません此の章の圓意の二字には事理の二圓を合藏して有ます法華經迹門弘通の導師に約して辯すれば理圓を顯すと云はねばなりません法華經本門能弘の導師に約して辯すれば事圓を顯すと云はねばなりません彼れは理の一念三千の妙法此れは事の一念三千の妙法にして所説の法軀に事理の不同があるゆへて有ます今吾宗祖大聖人に約して辯じませれば御出現の時の念佛眞言禪律等の諸宗の僧俗等各々己が所依の權教に執着して本地久成の本佛久遠實成の釋尊所證の本法たる法華經本門壽量品所顯の三大秘法の妙法を飽まで誦誦したる逆縁の機縁に

對して而も強て法華經本門壽量品所顯の三大秘法の妙法を説き聽かせて以て之れに毒して本門下種の遠縁を結ばしめたる有ますそこで念佛眞言禪律等の誦誦正法の輩の迷情の耳に逆らふといへども彼等が身軀に本來具足してある無始無作三身即一の事本覺の佛性に薰陶し隨順するが故に逆即是順の圓意を顯すと御書になつたて有ます逆即是順とは申すもの逆縁の輩は惡因によつて墮獄の惡果を獲ます順縁の者は善因に酬へて成佛の善果を得ます前て辨じましたから略して辨じません○倍是より不輕菩薩の法華經の弘通と吾宗祖大聖人の法華經の弘通と三同三異有る事を辨じて聽せませう祖書録内廿七の卷下顯佛未來記に云く此人得三守護之力一本門の本尊妙法蓮華經の五字を以て令廣宣流布於閻浮提一歎例せば如く威音王佛像法之時の不輕菩薩一乃至彼の廿四字と與此五字一其辭雖殊其意同之此の文は所弘の法の同一なる事を判じたるなり是れ一彼の像法の末と與此末法の初此れ同此の文は出世の時同一なる事を判じたるなり是れ二彼の不輕菩薩は初隨喜の人なり日蓮は名字の凡夫也此の文は能弘の人俱に外凡の位なる事を判じたるなり是三己上此の祖書の文は宗祖が御自身と彼の不輕菩薩と一往例因遊はされたる文て有ます實を克して論れば此の判文の中の所弘の法も出世の時代も能弘の師の位も全く不同て有ます如何となれば彼の不輕菩薩の所弘の法門は法華經迹門の開權顯實の四一開會の妙法て有ます其

所化の機類は全く述門の機にして本門の三秘の妙法を聞くに堪へざるが故に不輕菩薩も本門は密に御説きになつて經文には乃至遠見四衆一亦復故往禮拜讚歎而作是言と説て唯遠見と遠住とによつて開近顯遠の本門の四一開會の法門を表示したるのみで有ます故に此の不輕菩薩は法華經の迹而本裏の弘通をなれたて有ます其所で吾宗祖大聖人は開近顯遠一部唯本の法華經 本門壽量 所顯の事の一念三千神力結要別付の妙法を弘通遊されたて有ますよつて開近顯遠一部唯本跡内の述門の妙法を用ひて法華經の本面述裏の弘通を遊されたて有ます是は所弘の法華經に本門と迹門との不同ある事を含みたる判文の意で有ます祖書に彼は像法の是は末法の初と判じたるは是れは出世の時節に像法と末法の不同ある事を判じたる文で有ます祖書に彼の不輕菩薩は初隨喜の人なり日蓮は名字の凡夫と判じたるは是れは能弘の導師の位階に不同ある事を含みたる判文で有ます是の如く不輕菩薩と吾宗祖大聖人と己上三の不同が有ます是れを三同三異の法門と申すて有ます是れは宗祖が自ら判じたる文で有ます又後世に至り不輕と宗祖と七異三同ある事を判じたる先哲が有ます此の方は西京要法寺日辰上人と申した方が造佛讀論義と申す書を著し其上卷に書て有ます書に乏しき學生のために辨じて聞ませせう一には彼の不輕は像法の末宗祖は末法の初也二には彼の不輕は初隨喜の人宗祖は名字の凡夫也三には彼の不輕は廿四字の正

行宗祖は壽量所顯神力結要五字の正行也四には彼の不輕は但行禮拜の助行宗祖は二部廣略の助行也五には彼の不輕は杖木瓦石の法難宗祖は刃杖遠流の法難也六には彼の不輕は得聞此經六根清淨の入滅宗祖は名字聞教の入滅也七には彼の不輕は釋迦の垂迹宗祖は上行の再誕也七三同と云ふは一には彼の不輕も宗祖も俱に所化の衆生は本未有善の機を化導したる也二には彼の不輕も宗祖も俱に三類の強敵を相手に法戰したる也三には彼の不輕と宗祖は俱に下種益を施したる也三同是の様な事を穿鑿したら澤山の同異が有ませう彼の不輕は過去の人宗祖は現在の人彼の不輕は威音王佛の滅後の人宗祖は釋迦牟尼佛の滅後の人也却と穿鑿するときは際限も有ませんが今は學生達の智解を發する爲に辨じたて有ます

宗教と論ず

(續き)

勝水淳行

宗教と教育との關係。教育現象とは教育者と被教育者との間に於ける有意的關係なり、換言せば教育とは比較的長者が比較的劣者に向つて、一定の目的、方法、及、制度を具して、其の心身全體を陶冶せんとして施す處の有意的動作にして、此兩者の關係を稱して、教育現象と云ふ、而して人は凡て外界、自然によつて影響せられ、大に感化せらるるも茲に

所謂教育の謂に非ず、一言注意すること爾り。今此の二者の關係する處を見ん。
先づ教育の宗教に及ぼす影響を見んに、健全なる教育は知情意をして圓滿に發達せしむる故に吾人が其の宗教的客體を認識するや、最も健全なる智識を以てし、迷信怪異を勸絶し、温雅なる信仰を樹立し、宗教的實行を爲すに最も勇者たらしむ、かくして宗教上より社會の改善を計るにより、社會は颯爽として進歩の氣風を生じ、活動的現象を生じ來たる、之れ教育の宗教に於ける關係なり。次に宗教の教育に於ける關係を見む。

宗教的信仰ある時は意力益々健強嚴靜なるを加へ、感情益々高潔にして温雅なる同情豊富となり、學識徳望益々重きを致し、教育者の資格として要すべき、知情意の修養には最も偉大なる効果を與ふ。

宗教的信仰に依つて涵養鍛練せし意識を以て育英の任に當り、温顔慈母の如く懷慕の中心となり、壯重嚴父の如く威嚴を持し、寬嚴宜ろしきを得、熱心と慈愛とを以て見女を薫風徳化せば其効果の偉大なる蓋し愕くべきものあらん、女兒や遠からずして至純神の域に達せん。之れ宗教の教育に於ける關係にして其の効力なり。

此の如く宗教と教育とは互に相關する密接なる現象なり、約言すれば即ち左の如し、

宗教は教育によつて完成せられ、教育は宗教の影響によつて其の效果最も大なり。
宗教と他の實際的現象。宗教と他の實際的現象との關係を論ずるに就て諸の他の現象を見ざるべからず。

- 經濟現象 娛樂現象 物質現象 教育現象 倫理現象
- 宗教現象 其他諸種の現象

茲に社會の形成せらるるや、先づ必要を感ずるは各人の生活なり、生活問題は吾人に必要缺くべからざる實際問題にして最初に發する吾人の欲求なり、故に吾人は生活を營まん爲め茲に競争を初め、遂に經濟現象の興起を見る、吾人の生活稍緩うして茲に種々の欲求生じ、諸種の現象起り來たる。未だ道德の觀念厚からず、智識の欲求多からず、先づ快樂を得んとどの欲求最も熾なるを見る、娛樂現象茲に起る。酒色遊踊の如き之れなり。爾れども社會漸く進歩し、人知漸次に發達するに従て、道德的思想發達し人格の觀念生じ來たり、人の本性は快樂に耽り、生活欲を満足することのみに非ざるを覺り、人生の眞意義を知るに至つて茲に智識的欲求最も旺盛なるを致し、教育現象生じ來たる、かくして倫理現象又之れに伴つて生ず。而して之れ等は皆實際的現象なり。即ち生活的欲求満足せられて、心胸少しく餘裕を得て快樂を欲求し、次いで快を貪り、樂に耽るとの人生の眞義に非ざるを覺知し、人生社會の眞意義を覺り、人格の觀念起るに及んで、生活を

完全し、社會を改善せんと欲し、よりして教育及び倫理の現象を來するに至る。然れども吾人意識の欲求は之れのみにて満足する者に非ず。即ち生を見、死を見るに及んては吾人の生活は只だ相對的の意義のみに非ざるを感じ、茲に宗教的欲求を生じ、發して遂に宗教的現象となる。社會の現象は必しも今述べし如き順序によつてのみ生ずる者にあらず、吾人の意識の欲求は或は連續して次第に出て、或は諸種同時に發起する者にして、時と處によつて同じからず、然れども凡ての現象皆自己保存の欲求を中心として出發するの點何れも同じく規一也。故に宗教も亦一種の生活問題解釋の現象として見るとを得、即ち宗教も亦實に實際問題に關する現象たるなり、それ生死は吾人の目睹する事實なり、相對的智識、相對的人生觀にては到底之れ等の問題を解決し満足すること克はず、此に於て即ち絶對無限の實在を認め、其の客體(即ち實在)を信仰し、之れによつて生死の大問題を解決し、世に處する所以を定めんとす、之れ實際問題たる所以なり。既にそれ宗教は實際問題たり、他の諸種の實際現象との間に於ける密接なる關係知るべきなり。即ち宗教的信仰あり、其の欲求の満足せられたるものは心胸豁然として意常に坦々、事を行つて倦まず、貧に處りて厭はず、津々たる趣味常に胸中を潤はし、人を教へてよろしく、人を導いて感化強烈、氣品高く情温き徳を養ふことを得べし、宗教の實際現象に及ばず影響何う夫れ

深き。

宗教と國家。宗教は宗教的意識によつて客體を認め、之と交渉せんとする欲求的關係なり、故に其の客體の性質同一ならば其の信仰を中心として各人相結んで茲に一團體を形成す、宗教的團體即ち之れなり、今此の宗教的團體と國家との關係を見んに頗る複雑にして密接なる者あるを見る、何となれば國家を組織せる國民は宗教的團體を組成せる團體たればなり、今少しく之に就て論ずる所あらん。

抑々宗教とは西語の Religion のとして、此の語、ラチンの Religio より來る、Religio は尊崇する Revere の意味を有する Religio なるラチン語の動詞より來りしものにして客體に向つて信仰尊崇するの意なり、爾かり宗教は此の信仰尊崇の下に集つて結合せられたる團體なり。而して國家は主權者と個人の結合體との關係なり、國家論之れに就て明晰なる觀念を與ふ、曰はく、

個人意志は主權者の意志によつて拘束せられ。之によりて政府の系統成り、臣民の秩序立つ。一切の臣民が斯くして組織せられたるは何等か一の名稱なかるべからず。余は之を稱して國家となす。(遠藤氏著 國家論四八)

と。即ち國家は個人が主權者の意志の下に相互に意志を拘制せられつゝ結合せる團體なり、而らば國家に於ける個人の狀態は如何、之れに就て國家論又曰く、

以上は只宗教と國家とに關するもの、抽象的問題をのみ舉示せしのみ。此の兩者に關しては問題實に夥多にして二三の到底よくすべきに非ず、而して之等の問題は皆現象起後の問題なれば單なる研究を以て輕々に原理的に斷案を下だすべき者に非ず、必ず歴史に徴し事實的に結論すべきなり、故に余は之れ等に就ては後日を期せん。

三. 結

心理的方面より見れば宗教は宗教的欲求を満足せしめんとする現象にして、人と神佛との關係なり、換言せば宗教的主體と宗教的客體との關係なり、そは即ち宗教的意識と稱する一種の意識過程に屬する心理的現象なり。

今又之れを社會的方面より觀んて、宗教的意識の發して其の客體の交渉し關係する處に於て爰に外界に現はれ、他の凡ての社會的現象と關聯して人文的に活動する一の社會的現象なり。仍て今一言之れを約せば、

宗教とは吾人が智に由て實在を認識し、情に依て之を直觀し、意に仍て之を交渉せんとする宗教的欲求が發して諸種の現象と連關して人文的に活動する社會現象の一なり。

尙宗教を論ずるには客體の方面よりして論ずべからざるものあれど、そは期して後日に譲る。

國家は個人の半面を以て組織せられたる團體に外ならざるなり。社會に於ける此の秩序は社會の平安に缺くべからざる者なり。故に小社會の合併して以來國家組織を有せざる社會あらざるなり。個人はこの組織をなすと同時に一面に於いては自由意志を以て種々の行爲をなすあり(國家論九四)

と。之れに依て之れを見る、國家と宗教との關係又了解するを得、即ち一は命令的拘束的團體にして一は自由的信仰的團體なり、而かも兩者は同じく一人に依つて組成せられたる二方面の現象なるを思は、國家と宗教との關係は愈々密接にして愈々複雑なるを覺ゆ、

今國家團體と宗教團體との間に起るべき必然的問題の二三を擧げん。

- (一) 宗教は國家の上に位すべきか、又國家が宗教の上に位すべきか、抑又宗教と國家との同列に然るべき者か如何ん。
- (二) 宗教と國家權力との關係如何。
- (三) 宗教團體内部の組織と國家の組織との關係如何。
- (四) 宗教團體と國家團體とは何れの點に於て抵觸し、何れの點に於て相一致するか。
- (五) 若し權力的命令と信仰的命令と抵觸したる場合には個人は之れに對し如何すべきか。

文學の變遷

△ △ △

我輩の演題は「文學の變遷」とは掲げられども、敢て素人たる我輩が此所に文學者大先生がたの作を批評せんとするが如き恐れ多きわざを試むる譯にあらず、只適當なる文字の見出されざる、まゝ假りに文學の變遷とは題したるなり、我輩の諸君に向て開陳せんとする所は文學に反映したる明治の時代精神の變遷を述べ少しく是が批評を試みんとするにあり、世の文學者先生は所謂傾向小説なる者を貶下すれども我輩の見所を以てすれば、如何なる文學、如何なる時代の文學、然り如何なる時代の如何なる大文學なりとも、一として傾向文學傾向小説ならざる者なし、何者、凡そ文學は時代思潮の反映時代の鏡なればなり、故に我輩は傾向小説を貶下する所以の理由を見出す能はざると同時に、文學を見て以て當時社會の傾向、換言すれば當時の時代精神を知るに足るを信する者なり、されば我輩は此見地に立て明治の文學に反影せる時代精神を着手し聊か其批判を試んとす。

明治十四五年頃に當り稗史小説なる者非常に流行せり、是れ本より紛々たる小文士にあらず小説作者の手に成れる者にして、之を純文學の見地より見れば元より批判の價値を有する者にあらず、且つ未だ幕府時代の戯作者氣質を脱せざる陋劣

なる明治の新文學は道歐紅露の諸家の輩出に依りて、さながら暖室内に生育せるウドの大木の如くに危然として生長せり然るに明治廿四年國會開設と共に一陣の朔風は此ウドの大木の軟質の文學を襲ひ來りぬ、政府は國會開設と同時に嚴烈なる國家主義を以て社會一切の事象を拮制し、之を強行するに現實の力、官府の權威を以てせり、是に於て哲學も、宗教も、文學も、美術も、國家主義なる大魔王の前に低頭平身するに至りぬ、國家主義は宣して曰く、國民よ、汝の生れたる國家の爲めに盡す可く生れ來れり、汝の生れたる國家の爲めに死せよ、是れ汝の天職なりと、斯くの如くして文學の對稱は空間的に壓縮せられぬ、文學は世界的にして且つ世界大ならんと欲す、されど國家主義は世界を見る勿れ只汝の國家を見よと云ふ是に於て文學者は前を望む能はず、後を顧る能はず左右を見る能はず、彼に向て殘さるゝ所は只上下の二途あるのみ、彼は頭上を仰がずんば脚底を見ざる可らず、九天の土が九地の底か嗚呼されど彼は九天の上を仰がぬが爲めには其顛の痛みの烈しさに堪へざりき、故に彼は首を垂れて九地の底を望めり、彼は眼目せり而して暗黒なる主觀の中に其身を投ぜせり、斯くの如くして彼の筆端に迸發し來る所の者は陰慘暗黒なる彼自身の純主觀なり、深刻、深刻、深刻てふ呼聲が一時文壇を支配せるは實に此時なりき、之に加ふるに政府者は國家主義を以て一切の事を箝制すると同時に、宗教を迷信

なる小説作者に依てものせられたれば、品位の賤陋なる士君子の手にするを辱づる程の者なりき、されど文學的價値の皆無なるに拘らず又品位の賤陋なるに拘らず當時の社會的狀態は明瞭に此破鏡の中に映發するを見る可し、其小説の主人公なるは當に落ちふれたる旗本の若様なり、其女主人公は同じく落泊せる旗本の御姫様なり、しかも、時世時節なれば致し方もなく、御姫様は左様をとり、若様は銀行員又は會社員となり居りしが、宴會の席上ふと再會し御定まりの悲劇喜劇を簇生するに至ると云ふすじなり、夫れより明治十四年國會開設の約成りてより政府はあらゆる手段を以て言論の自由を壓迫し民間の政客を迫害し結社の解散、新聞雜誌の停止禁止は頻々として落下し來れり、是に於て在野政客にして蠻勇あるも新智識に乏しき豪傑連は處々に一揆的騒動を惹き起したるが少しく新智識ありて蠻勇を有せざる輩は小説を借りて以て婉曲に自家の政論を大に鼓吹しぬ、されど彼等は創作の才に乏しきものから、多く西歐の政治小説を翻譯したりき、矢野龍溪君の經國美談の如き其著名なる者、要するに此時代は文學が政治の奴隸となりたる時代なるを見る、然るに明治二十年前後に至りて明治の清新なる純文學は其萌芽を發したり、坪内雄藏君の書生氣質なる者即ち是れ、坪内君の文學的技術文學史上の位置の如きは如何にともあれ、明治の新文學新小説を創製せるの功は決して没す可らず、斯て生れ來たる清新

として排斥し科學を獎勵したれば、國家万能主義と科學万能主義と兩々手を携へて天下を横行し、益々此殘酷なる悲惨の狀態を激甚ならしめぬ、折りしもあれ陰慘憂鬱なる冥想に耽れる彼れ文士は、あらず文士の背後に隠れたる幾万の新日本の子らは、濃き睡りより覺めたる人の如くに頭をもたげて天地を觀一觀しぬ、嗚呼美はしの自然よ、自然は斯く造も美はしき者なりかと、覺ゆる讚歎の聲を放ち、自然を讚美し自然を渴仰し、自然を憧憬し、自然を透して大なる自我を其奥に見、歡喜のあまり聲を揃へてあこがれの歌を吟唱し始めぬ、當時新体詩なる者の俄然として勃興せるは是れが爲めなりきされど自然を透して大なる自我を其奥に見るは、我が同胞を透して同胞の心の奥に大なる自我の映像を見るの層一層凱切なるに若かざるなり、是に於てか自然に對するあこがれは一轉して人に對するあこがれとなり、男女兩性間の戀愛熱は一世を支配するの潮流となれりされど甘き戀愛も新日本の子に向て全然なる満足と與ふる能はず、此所に於て彼等は深き懷疑煩悶の淵に投じ終はんぬ、彼等は明治政府の指導の下に嘗て科學を研究せり、されど科學は彼等に向て何者をも與へざりき自然を透して見たる汎神の映像も、人間を透して見たる温かさ自我の映像も彼等に向て満足と與ふる能はず、彼等の腔子裏は近世科學の思想と自然より來れる汎神的思想と戀愛より來れる情熱と混雜錯綜して暴風のあるゝが如くあれ廻はれり、

彼等は一度ひ宗教の門に向て其足を投じたるは此時なり、彼等思へらく、明治政府の獎勵せる國家主義と科學萬能主義とに依て吾人は斯くの如きの煩悶を得たり、然らば明治政府の迷信として排斥せる宗教は或は吾人に向て煩悶の解脱を與ふる者なるやも計られずと、萬一を僥倖せんとして彼等は宗教の門に向へるなり、然れども世の牧師僧侶は少しも彼等の煩悶に向て同情を與へず、無生氣なる研究的道學者的習俗言語を羅列して之を説教と稱するに過ぎず、殊に靈界の大指導者たる可き身を以て國家主義の前に拜跪するを見て、天國に入るの門は此所にもあらざりけりと彼等は塵を拂て又も宗教の門を出て去に至りぬ。

今後此思潮は如何なる變遷をなし、如何なる歸結に達す可きか、我輩之を豫言する能はず又何人も豫言する能はざる可しされど求むる者は與へらる、此科學を超越し、此汎神思想を超越し、此情熱を超越したる一段の高所に於て凡て此等の者を綜合調和せしむる所の一大思想一大人格の起り來て此新日本の煩悶の子に向て解脱の鑰を與ふる事ある可きは我輩の確信する所なり。

以上は我輩の明治の思潮に對する批評なるが、話頭を一轉して最後に我輩の告白を述べんとす我輩は從來或は辯護士となり、或は社會主義者となり、幾多の境遇の間を變轉せる者なり、此所に感ずる所ありて來る可き大なる者の前に道を直

くするヨハネたらんが爲めに今後教會の演壇に立て傳導の事業に従はんとす、本より我輩は神學を知らず聖書の深き講釋をも知らず、されど神學と聖書とに詳しく者は世多く是れ有り只時世の要求に耳傾け人の子の煩悶に同情を表するの牧師は我輩未だ之を見ず而して我輩此時世の要求に感じ、人の子の煩悶に同情を表するに於て敢て世の牧師先生の後に落ちざるを信する者、神學と聖書とに詳しくはしからずと雖も牧師先生の前に耻づ可き所以を見ざるなり。

日蓮聖人の種族觀

小倉 樗 哲

日蓮上人が其遺文録中に自から記されてより以來、宗敵が以て幾多誣妄の種として、上人の神聖を傷けんと企てたる所謂旃陀羅の子云々の語は、察するに正に是れ上人が階級的種族觀を打破せんと計らせ給ひたる活ける教誡にあらずんばあらず。

蓋し旃陀羅とは、古代印度語の屠者の義にして、我國に於ては、中世以後、是を穢多と稱す、穢多とは餌取の約にして、牛馬屠殺を業とする者の謂なり。穢多の起原に就きては、吾人未だ明にするを得されども、

(穢多は肉食族の移住民なりともいひ又は支那の蹄化族なりともいふ) 足利以前之れを記すあるを見聞せざるを以て見れば、想ふに足利以後中世紀に始まるものなるべし、而して穢多を人類以下なる階級におきて卑めるは、蓋し佛教の殺生罪惡の思想より、屠殺の穢れ多きを忌避せしより來れるものなるべし。

古來殺生に就きては、我國に於て甚しき誤解をなせるを見る、即ち動物を殺戮するは、是れ皆殺生の大罪としたる迷信なりとす、然れども實大乘の妙諦より見れば、草木山川魚鳥蟲介は云ふも更なり、森羅萬象一として活ける妙諦にあらざるなげんや、此の如きを以て殺生と断せば、吾人の米を煮るも薪を焚くも、茶碗を割るも、是れ等しく皆な殺生ならざるべし、何ぞ雷に動物殺戮のみに限らんや、然らば何をか殺生戒とは云ふ、殺生のことたるや、蓋し生あるものを、無益に殺戮するを云ふなり、吾人森羅生々の現象を觀し來らば、生とし生けるものにして、何物か自己の生存を欲せざるもの

やある、大は宇宙の活動より小は單細胞の微動に至るまで、皆な是れ生存欲求の結果なりと云ふも敢て過言にはあらざるべし、されど吾人は自己の生存欲求を満足せんがためには、生存の資力を同化作用に求めざるべからず、是れ宇宙の妙諦が與へたる必然の結果なり、則ち古人が自己の靈性を發揮せんがための必要に外ならざる也、吾人は此の生々欲の結果を

知りて、他の生存を妨ぐるは情に於て忍びざるが如しと雖も、吾人は又此の必然の妙理を捨て、自己靈性の自覺を去る能はざる也、否な此の如き必然の必要を捨つる也、宇宙自然の妙理に背叛するものにして、取りも直さず、自己の本性を滅却したる大罪惡に外ならざれば也、茲に於てか吾人は日常の菜食も認容せざるべからず、必要ならば、魚類獸類の肉食をも認容せざるべからず、之れを以て必ずしも殺生とは断せざる也。

然るに吾人々類は、自己の衝動に任して、必要以外他の生存を斷つが如きことあり、否な生存を斷滅するが如きことなざるも、ときとしては、假令そは直接にあらず、間接なりとは云へ、其の生々の満足欲求を妨ぐることあり、是れ寧ろ殺生罪に該當するものにして、大乘妙諦の意は實に是に存するを知るべき也、されば屠者必ずしも穢れたるにあらず、要は唯だ必要を認むると認めざるとにあるべし。

庶幾、かゝる迷信は中世以後(或は以前より)我國上下一般を通じて、屠者は恰かも先天性なるが如く解し、穢多として人類以外のものなるかの如く想はれぬ、かゝりければ、彼等も亦穢多として、自から墮落して、一般人民と交を斷つて、部落を作り、團隊を組織して、特殊的生活を營むに至りぬ、豈に憐れむべからずや。かくの如く階級種族の感盛なる時に際して、聖日蓮が自か

ら東夷東條の旃陀羅の子なりと云へるは實に注目し價するこ
とならずや、(上人の出世は鎌倉時代なれば當時階級として劃
然たる 多はなにも稍々是に類するものありしならん兎に角
旃陀羅とは最下層民なり)吾人暫く此の有難き上人の言に
耳を傾けざるべからず、而して上人は聽て又言へりき。

我れはかひなき凡僧なれども、法華經を弘むれば、釋尊の
御使なり、梵天帝釋も我が左右に事へ、日天月天も我が前
後を守り、天照八幡も頭を垂れて我を敬ふべしと。

吾人は靜思默考暫くにして悟りぬ、上人の此の言や自から厭
落ありて、明かに種族階級の弊を打破せられたるものなるを
吾人は先きに殺戮殺生に就きて聊か卑見を述べたりき、大
乘妙諦より觀察すれば屠者必ずしも、殺生戒の穢を有するに
あらず、況んや其の種族をや、吾人一と度森羅の妙諦を感得
し來らば、法界は即ち一味同躰にして、無差別平等の大圓界
にあらずや、況や、五躰備り五感具りて、等しく言語を解し
文字を解し、靈智亦備りたる、吾人と等しき人類が、假し不
教不知によりて、殺戮殺生の大罪を犯したればとて、一とた
び靈智動き、靈性復活して、甚深微妙の妙諦に接し來らば、
是れ否むべからざる菩薩の大業を成滿せるものにあらずや。
然り定に日蓮聖人は假令穢多の子と自稱せるは、誇大なる
言なりとは云へ、吾人々界の俗情にありては、身は綺羅錦繡
を裝ひ、出づるに騎馬あり、入りては珍味佳肴を飽食し、財

山をなし、珍寶藏に充てりと云ふも、牛馬を屠りて身には糞
糞を糞ひ、食飽くなく財の一物として畜ふるなしと云ふも、
畢竟するに、彼は我より幾萬の財と美衣美食あるとに過ぎず
要は是れ比較的富者なりと稱するの外、何等吾人の貴むべき
所以を知らざるなり、觀じ來らば人界のこと又泡沫の如けん
のみ。

嗚呼此の如き泡沫の如き人祿人爵は、如何に富みたればと
て、如何に多ければとて、畢竟是れ無意義にあらざるや、かく
の如く無意義泡沫の末にのみ走りて、將軍といひ、大名とい
ひ、武士といひ、農夫といひ、工人といひ、町人といひ、穢
多といふ、甚深微妙の大圓觀より來れば、げに抱腹絶倒の至
りならずや。

茲に於て乎、上人は妙法大圓教の妙諦に於ては、かゝる誤
妄のあり得べからざるを、色躰に於て垂示し給へるなり、上
人は先づ自から人界の最も卑しき階級より、佛界の大成滿に
到達せり。
嗚呼吾人一とたび茲に想到し來れば、佛界の光明榮として、
其の滿るが如き、慈悲の偉大なるに感謝せざるべからず、然
るに蒼蠅の如き蒙昧の愚人等、かゝる偉大なる上人の慈悲を
解せずして、世俗の卑むを利用し、上人を穢多の子なりと稱
して、敢て中傷讒誣を圖らんとす、(日蓮深密傳の如き高橋)惡む
べく又哀むべからずや。

約教の勝劣

憲 洪 院

見渡せば柳櫻をこきませて、都が春の錦なりける、今は
昔し、西の都は、六條の本國寺に、蓮意と云ふ人があつた、
この人中々の學者で、八宗兼學とても稱したてしよふ、ある
時は、圓覺經を談し、楞嚴經を説き、迦葉靈山微笑の花を賞
揚し、禪宗の法門を弘むることあり、また真言宗の、所謂大
日覺王の秘法、即身成佛の奧藏を教ゆる時もありしと、故に
六條門徒の多くは、他宗になる者があつたまた、法華經をも
談義する時もありしと。

二十一箇寺は、これを難じた、彼の蓮意の方では、今の
身延の上人になつて居らるゝ、日賢などゝの法門書付の卷
物をかへしに、二十一箇寺返事もならぬと、蓮意が門派これ
を手柄に、日經聖人の寺の前にて物語せしと。

蓮意は、本滿寺を始め各々申すに、この立て派は蓮意一
人の立てたる法門ではない、日賢や、通應院本滿寺など、學
門の日に各談合し、諸部の圓教と法華經の圓教と、同じこ
とである、其上本迹の体同と云ふ時は、爾前の經論を以て、
本迹一体の證文とした、本迹一体と云へば、餘經も同じこと
であると云ふ、卷物をして、各々學門の談合の時に、申合せ
たること故に、法華經をも、他經をも、弘め、また同じよう

に、修行したのであると理りしに、二十一箇寺、何れも返事
に詰まつたと、京中の評判なりしと (常樂院日經聖人
本迹抄往見)

華嚴の圓と、方等の圓と、般若の圓と、法華迹門の圓と
は相待妙で、法華本門の圓は絶待妙である、華嚴、方等、般
若は、法身の常住を説けば、法中論三て、法華迹門は報中論
三て、法華本門は應中論三である、華嚴の三法妙、方等の三
法妙、般若の三法妙、法華迹門の三法妙は相待で、法華本門
の三法妙は絶待である、法華迹門は女惡の成佛を説く、これ
爾前に勝るの一つ、二乗作佛を説くこれ其二つ、一念三千を
説くこれ其三つ、法華迹門は理の無始無終、理の常住、理の
即身成佛、理の一念三千である、法華本門は久遠實成を説き
顯はす、これ迹門に勝る所以の要である、法華本門は事の無
始無終、事の常住、事の即身成佛、事の一念三千である、

爾前の圓は滾々たる川流の如く、迹門の圓は滔々たる江
河の如く、本門の圓は漫々たる大海の如くである、爾前の圓
は、坦然たる土山の如く、迹門の圓は巍然たる雪山の如く、
本門の圓は塊然たる須彌山の如くである、爾前の圓は粲然た
る星の光りの如く、迹門の圓は皎々たる月の光りの如く、本
門の圓は赫々たる日の光りの如くである、更にまた爾前の圓
は小國の王の如く、迹門の圓は六國の王の如く、本門の圓は
轉輪聖王の如くである、爾前の圓は和松の如く、迹門の圓は

唐船の如く、本門の圓は洋船の如くである、爾前の圓は白銀の如く、述門の圓は黄金の如く、本門の圓は如意寶珠の如くである、爾前の圓は水鏡の如く、述門の前は硝子鏡の如く、本門の圓は銀鏡の如くである、爾前の圓は翳眼の人の如く、述門の圓は、一眼の人の如く、本門の圓は兩眼の人の如くである、

想ふに日蓮聖人は釋迦牟尼佛の聖經を勝劣主義の眼を以て觀られたのである、勝劣主義とは研究的也智慧の也向上的也、而して慧に堪へざる者の爲めに、更に信仰門の光明活路を開かれたのである、蓋し信仰門は應用的也向下的也平等主義也、これに入るに信を以てするは頼中の頼で、慧を以てするは頼中の漸である、

嚮きの連意の如きは頼中の漸路を歩む人なりしならんあ、連意の如きは、これ偏に約教の勝劣を識らざる故の所爲である、

古畑の祖のたつ木に居る鳩の、友よぶ聲のすさき夕ぐれに記す、



俗間傳説の日經上人 小倉 樗 哲
余は昨年中常樂院日經上人の研究の資料として、太平洋紙上に『神話的に現れたる日經上人』と題して、俗間流傳の所謂奇蹟的日經上人の紹介を續けむとせしが、種々なる事情の許に、遂に其の篇の完結を見る能はざりしは、余の大に憾みとするところ也。
多事多端なりし昨三十八年も、流るゝが如き地球の轉廻に、今は既に昨日となりて、血脈かりし世界は、又茲に一轉して、旭旗翻々として平和の風にひらめくに至り、吾人の新舞臺は新希望を上げて、こゝに開かれぬ、吾人豈に袖手空談、安然として惰眠するに堪へむや。
此の時に際りて、先聖先哲を回憶し、以て新天地の活躍の資となさむは、敢て徒空のことにあらざるべきを信じ、太平洋所載の續稿として、又補遺として、茲に俗間傳説の日經上人を傳へむとす。
蓋し常樂院日經上人は、日蓮宗中興の偉人にして、聖門史上、第二期を劃したりし人なれば、聖祖門下の等しく、研究すべき重要な人なりとす。
されば、其の一舉一動、些末の點なりとも、以て研究上等閑に附すべきにあらざらず、況むや俗間流傳の説話の如きは、

上人を抽象化したる、時代の評説と見るべき重要な資料なるべければ、諸君は、其研究に留意せられむことを望むや切なり。

上人の俗間傳説として、所謂奇蹟的に現れたりしは上總加賀なり、されど上總説話につきては、曾て太平樂に所載しあれば、今は重復を避けて、加賀の説話を試みむに、正史の上より傳へられたる上人は、丹波に通れてより、北國に漂ひ越前を経て加賀に入りたりしに、三輪志摩の守の知遇を得て、再び橋伏進化の長廣舌を揮ひたりしなるが、俗間の傳説よりせば、上人は越前より加賀に入りぬ、然るに京都慘刑に處せられたりし後なりければ、耳と鼻とを備へざりき、されば卿人等相議して、天下の大罪人なりとなし、誰一人として宿賃すものとしてなく、あはれ、孤身漂然寄る邊なきさああらぬ身熱血燃ゆるが如き上人も、今は此の數ならぬ迷兒等に抗せむ術もなければ、唯た目的もなき闇夜を足に任して通りぬ、さるほかに但ある陋屋の、隙間を洩るゝ燈火をたよりて、其主を驚かし、『我に一夜の宿賃を給へ』と申しけるに、主は四十の坂を越へにし寡婦の、寄る年波のそれならで、額に彫める皺の、曾ては味氣なき世に苦める同情深きやさしの人なりければ、いたくも上人の様に同情を寄せて、兎や角とていたはりて云ひけるは、『一夜の宿は何よりの容易ことには候へど

も、ゆふべ庄屋よりの申達せられ候ことあれば、後のたゝりの如何に候ふべきやも圖られ候はじ、所詮此の身は如何相果て候とも、何の心残りも候はねど、若しや貴ふとき上人の御身に災にても降り來り候はむか、妾は何とて閻魔大王に申し謝すべしや』とて、涙瀧の如く下りて、啼嘘啼泣、道には我身を忘れて泣き叫ぶなりき、上人もそのことわりあるやさしき心に感し給ひて、今は暴虐なる幕政に抗すべくもあらぬ由を語りて、さらばとて其處を辭し去らむとしぬ、されど寡婦は暫しとて上人を押止め『遠き昔尋ねれば、袖すり合ふも多少の縁とは聞きぬ、さるを貴き上人の、妾如きを倚られ給ひしは、これぞ譯ある昔の縁ならむ、申すも苦しけれども、せめては露の凌ぎに、軒端にても宿り給ひ候へ、妾は知らぬ由申さば、後々如何なる糺命のこれあり候とて、何の科をもなかるまじければ、せめては……』とて切りに申し入りければ、上人も辭みかねて、こゝに一夜の宿をば借りぬ。
夜は次第に更けて、九つ告ぐる鐘の音も既に過ぎて、八つの鐘の響き渡らむと、夜は何となく淋しさを加へつゝ。
上人は疲れたる身ゆへ軒端の宿りにも、たやすく夢を結びて、給ひしに枕邊に訪づれゆくりなくも警鐘の響きの耳を貫き凄しき火炎起りぬ、折から風は一ときは烈しく、見る／＼火焔は猛舍を揮つて、火は四方に廣がりぬ。
上人も餘りのことに暫しが程は茫然たりしが、火の手は益

々盛んにして、上人が宿借る家をも、今は見る／＼火炎に包まれむとしければ手にせる、法華妙典を繕きて、此の家の安穩を禱り給ひぬ、火は爲に上人と家とを避けて、他より他に傳はり、曉告ぐる頃、鎮火しぬ。

さるにても怪しむべきは、彼の寡婦が家のみは、屋根板一枚の損傷とてなく、此の焦土の中に残りたることなり人は此の不思議なる様を怪しみ訝りて其の因由を尋ねければ、寡婦は今や包まむ術なく、遂に昨夜の事を語りければ、皆上人の徳の高きを感じ、遂に三輪氏の歸向するに至れるなりと。

此の傳説たるや素より、史料の微すべきなく、前後の關係より見るも、其の結構の點より察するも、明かに後人の附會なるは掩ふべからざる事實なるが如し、されど此の説をして、かく事實の如何を問ふにあらずして、當時の上人を回憶し來るの料に供せば、吾人は實に其の好材料たるを想はざるべからず。

吾人の覺束なき研究を以てせば、此の説話中に含まれたる上人は、實に天才宗教家か必有の三要素より成れるを見るべし、其の同情は蜜の如く、一寡婦がやさしき心にも泣かむやさしの人なり、而して其の剛健と確信とは、猛火をも止め、敵をして却つて其の徳に感泣せしめしこと是也、即ち信と愛と徳とより成れるを見るべき也。

更に一考せば、當年の上人が、如何に慘憺たる境遇にあり

にし得々然として毫も憚らぬものが多い殊に今日の學生に至るまで此惡風が行はれて居るのを見聞するが余は實に慨嘆に堪ぬのである、西洋ではベンニードレッドフルなるものが盛んに行はれて居るとのとであるが我が日本でもこれと類似のものが男女學生間に歡迎せられて居るのを見受くる、試に一日の閑を以つて市街を散策せよ至るところに華花文學あり詩書集あり式部端書ありこれ實に金碧燦然といはるか惡臭紛々といはるか、人或は社會の人々の美術思想や文學思想の發達した結果といふものもあらうが余は斯やうなもの決して文學でもなく又美術でもないことを斷言する、世は斯やうに淫靡浮華に流れつゝある新興國の大日本帝國は正に世界に雄飛せんとする抱負を持つて居ながら斯かる状態にあつたならば其前途も多く言ふを待たぬのである、本來人はそれれ異なる點も多いが先づ心理上より觀察するときは一般に十五歳位までは悟性の發達が盛んで十五歳位から二十五歳位までは理性の盛んに發達するもので、即ち人は悟性より漸く理性に進む者である、然るに理性の發達するにつけて又獨立思想や戀愛思想等の種々の思想が夥しく發達するものであるがそれと同時に社會の諸方面に向つて活動の地位を求めやうとするのは普通一般である、而して幸なるものは學校教育も無事に終へて素志を貫徹することが出来る、而し乍ら意志の弱い者が不幸學校教育中一旦失敗すれば何をなすにも氣力がなくな

しかを知るに足らむ、幕府は上人を六條磔に於て、鼻切り耳切りの酷刑に處しながら、丹波知見谷の隱栖をも安んせしめず、孤身刑餘の病軀を以て、北海に漂へるを、國中至る處嚴命を以て、此の一僧の一日の居を安んせしめず、賤しき一婦は、暗夜上人が路頭に彷徨を見て、遂に號泣するに至れり、衆は上人を以て、天下の大罪人なりとて、唾し去れり、其時其境、其の慘境を回憶し來らば、誰か一掬の涙なからむや。爾かも上人は安然たり、露を凌ぐ軒端に宿りて、自若として夢路に入る、顧眄すれば四面皆な敵ならざるはなし、其の剛毅、雄健、不拔の狀、目前に見ゆるが如くならずや、天下を教化し、教權を一統せむとするの志士は須らくかくあらざるべからず、茲に於てか、猛火をも斥けむ、衆敵をも感泣せしめむ也、教界漸く紊れむとするの今日、上人を語り、上人を憶ふは、吾人に取りて實に大なる力ならずや。

學生と宗教

良 惠 綠 汀

古來東西の歴史に徴するに社會の急に進歩し文學技藝の發達するとき所謂過渡期に於ては儉素の風が去つて浮華淫逸に流れ風紀の紊亂を來たすものであるが今日の日本も此條理に泄れず滔々として輕躁浮薄に流れ奢侈淫奔已の欲する所を肆

つて日頃より志して居た事は打忘れて終に自暴自棄の心を起し最早や救ふことも出來ない墮落て深淵中に陥るものが多し、夫故に如何かして青年時代には熱血に驅られて墮落に陥らぬやうに慎重の態度を取らねばならぬ、夫れには第一精神の修養である即ち何事があつても屈撓せぬのである、人は如何にも大事に遭遇すると凹む傾きがあるがこれは畢竟精神の修養が足らぬからである、余は此缺點を補ひ助けて充分に精神の修養が出来る道を講じたいたのでそれには宗教に依頼して宗教的信仰を有するのが最も適切であることを認む、之れに由つて吾人は安心立命といふものを得て一大艱難に遭遇した時に失望落膽して一生の前途を過るやうな危険もなく亦神佛に對する吾人の信念は吾人を正しき道を踏んで勇進させ腐敗奈落に陥ることから免かれしむるのである、又吾人に取つて最も大切な人格てふものも此信仰に由つて高尚になるのである、斯やうに宗教的信仰は尊きものであるから學生のこれを得らるゝのは甚だよき事である、否余は人によりては必ずこれに依頼せねばならぬと思ふ、而し乍ら宗教的信仰には種々あつて或者は佛教を或者は神教を或者は耶蘇教を或者は回教をなせ信仰する者があるが、中には所謂罽の頭も信心からといふやうに或る一種のものを迷信するものがあつてこれが爲め却つて智識教育の上に障害をなすことがある、故に吾人は吾人に最も適切なる信仰を求めなければならぬ、歐米の

諸國では倫理教育に宗教が是非必要であることを認めて中等教育に宗教の一科をさへ加へた學校が多い、勿論歐米諸國では耶蘇教が國教であるから宗教を學科の一として加へても宜しいが我が國では佛教の各派もあり神教もあり耶蘇教もありといふやうに種々の宗派があるから到底學科中に加ふることは出来ぬ、而し乍ら學科中に加ふることは出来ぬが各自個人として宗教に頼つて信仰を有することの出来ることは明らかである、昔からの大事業家大文學家大將軍等を回想するに皆一つの信仰を有つて居たとが解かる、例へば獨のシルレルの如き英のネルソンの如き、米のミマーソンの如き、我國の平重盛の如き狩野元信の如き近くは西郷隆盛の如き皆信仰を有して居つたのである、吾人も將來大事業をなさんとするには宗教に頼り宗教的信仰を有つて充分に精神の修養をすること肝要であると信ずる。

故に以は學生に宗教の必要なる所以を述べたのである。

滿洲の宗教界

在東天 三上 琴生

滿洲に於ける宗教は喇嘛教と佛教との二種である、喇嘛は西藏又は蒙古より輸入したるものにして、佛教は支那中央部より流れ傳はりしものである、喇嘛教は黄教と紅教の二種に分派せられ、滿洲に在るものは黄教派である、此の宗教派は支

那皇室の歸依優遇を受け特殊保護の下に大勢力を有して居る、故に至る所の寺院は黄教派に屬するものであつて、佛教の勢力は萎靡として振はない、而して滿洲に於ける喇嘛本山は奉天城内にある、伽藍は結構壯大美觀を極め金箔銀彩の彫刻は燦然として人目を奪ふの狀である、屋根瓦の如き亦黄色を以て作られ一見黄教派なるを知るを得るのである、喇嘛本山の住職は公事部面に於て其權力資格俱に奉天將軍と同一位である、故に喇嘛は官界に在りても大勢力を有し政界に重を負ふて居る、奉天の喇嘛本山には滿洲文字及び西藏文字に由りて書記せられたる二種の一切經の總鉢備付けになつて居る、而して信仰の對象は木像の釋尊である、尙其附側には頗る猛烈なる佛像或は淫猥なる像の祭られてある。夫は慨して鬼神の如き姿勢の像のみである、佛教寺院は甚だ少なく其安置せる佛像は温容慈顏皆辨天明神のその如くやさしいのである。

寺院には數名の僧侶、絹絨を纏ふて威儀肅然稍や氣概あるが如き風采あるも、教界の現状を窺へば幾百年の久しき保守姑息に陥つて進取の氣宇を欠き、唯だ葬式等の場合に讀經するを以て能事とし、舊事の儀式を株守して僧侶の任務終れりと爲し、宗教精神の鼓吹發展に對して一回の運動がないのである。而して士民一般の宗教的觀念頗る低く、唯習慣上單に佛陀の尊きものなるを言ふのみである、されば佛陀が無限な

る慈悲の光明を照被して毎ねに人類を向上的進路に導きつゝあるの活動を知らないのである。

僧侶は葬式以外には伽藍に籠居して洒掃に従ふて居る、予は四五の僧侶に接し談話を試みしも、經文を暗誦して巧妙に讀經の聲音を調ふるも讀書力を有するものなく、漢字にて對話する普通文字をも解せぬのである、故に葬式の際士民より尊敬せらるゝあるも其式を離るゝれば殆んど高等乞食の取扱を受けつゝ居るのである。

思ふに滿洲の宗教界は、已に永く膠々たる雲霧に鎖されて一道の光明なく現状維持を以て幾百年を経過するとも、滿洲人の心靈界は解脱の正道に進むを得ないのである、あゝ宗教の慈愛に接觸せざる國民は、生々の元氣失せて自由進取の軌道に迷ひ、刻一刻に泥びの地獄界に入る哀れなものである、滿洲僧侶の無氣力已に斯の如くなるを以て其葬式の如きも奇々怪々の現象がある、其一例を擧げれば、死亡者あるときは死人を長方形の棺に納めて之を自宅に安置し、更に新らしく唐黍と紙とを以て製作したる騎馬人形の像を寺院に擔ぎ行き、僧侶は白衣を纏ひ香を焚きて之に讀經し、死者の親族は其像を拜殿に置き、堂の周圍を十數廻したる後寺院の片隅に設置しある燒却場に於て燒くのである、其燒却時間は參列者の總ては嘔り泣きをするのである、而かも數十分の長き齋しく泣きつゝ居るのであつて、則ち此の嘔り泣きは其人を慕ふの情

念禁じ難しとの意義を以て泣くのである、素より親子兄弟の離別に際し感通りて泣咽するは、人生情義上必然の流露にして敢て否むべきにあらざるも、泣くを以て葬典上必要の儀式と心得居るに至ては、孝道の本義を誤まり居るものである、要するに滿洲の現代宗教界は、其小さき習慣儀式を株守するの外何等國家人生に對する貢獻なく、滿洲人は何れに向て安心立命を得んとするも眞に不可能である、唯だ輪奐宏麗なる黃寺の伽藍其昔しの旺盛を示すのみである、嗟呼

統一を讀む

金山猪助

▲大阪の通信を爲すに當つて少しく雜誌「統一」に對する所感を語らしめよ、第百二十九號を讀みたり、同感の涙亦法然たるものは歳晚の辭に非ずや、觀法華經の所感は是れ本多師の法華經講義に於ける副産的感慨の筆にして冒頭讀て先づ襟を正さしむるものあり、師や今や定まるの齡にありて海の如き智水は統一的樋口より龍水の如く流れり、觀法華經の所感も實に其一に屬せり、其四一開會、四法光顯の會得が日蓮上人の深意を體得するてふことの如何に其全文に人の注意を引きしめ、凡そ師の重き一言は近來教界に向つて一の注意を拂はしめ、あるは事實なり、人果教行理の五箇の教義が佛教の全体なりと云ひ且つ法界、佛身、人身、教法、行法の諸觀が即法華經の他面觀に過ぎざる所以を佛院觀に歸納し、而して开が佛陀の慈悲發動の起點論は既に一箇簡明なる信仰指示の

教義門として吾人はこの本論の序辭的文の中に既に業に了解の謝言を吐かざるを得ざるものあり、斯稿次續にして完結にあらざれども亦一箇の完結を告瀝せるに似て而も次稿の現はるゝは尙更に深き樂しき豫想を抱かざるを得ざる也。▲國友兄の法華諸異本に就てを讀みたり、兄の文章は此處暫時にして驚くべき進境を見せり、兄や本多師に就て法華經の根本理想を涵養し、加ふるに大學にありて科學的智能を滿たす、是れ所謂鬼に金棒にして眞に我教界の爲喜ぶべき現象の一たり、兄の文は其森嚴にして堅固なる書き振り師の筆に似て更に楚々たる優雅を存するは永く人の眼を引くに足るべし、本論未だ其序論に過ぎず、然れども法華出現の消息に新生面を開かんとするの意氣己に吞牛の風あり、法華は即全佛教なりと斷言し次に非佛説に對する感説を一言に破りたるの威風は予をして遙に快哉を叫ばしむ、夫れ信仰上より築かれたる研究は安全なり確實也、かゝる研究的態度にある兄の「又何の恐るゝ所なし矣」の一言亦大に予が信賴の念慮を強めざらんや。▲阪本師の置文講義是れ貴むべきもの、▲小倉君の宗教兩性論は要するに自他不二論の別様より起せる論文なり、▲梶木兄の不受不施史料參考としては追に其門に遊びたる其人の苦心現れたる、材豊富にして可、益々勉めて憚むこと勿れ、次に予の最愉快に堪ゆる一文に接したるは事實としての教家の妻帯問題、題てふ鐵骨生君の論文なり、全文五より成る佛敎家庭問題を議したる氣概ある憤憤的の實際論議にして、其文始めは容れて漸次急激に進み、其四に到つては其論を極む、是れ一格を作せる文士にして且又氣概を有する僧風改革を叫ぶ宗内の青

雑報

壯の沙門なる可し、夫れ妻帯問題は古き問題の如くにして新らしき問題なり、否志士の刻下日々腦裡を離るべからざる實際問題なり、理義の發揚と研究は最も大切なり然れども時事に逢着せる實際問題の研究も亦實に緊要切要なりと認む、吾人も亦這問題に對しては少しく述べんとするものなきにあらす、今爰には云はず、▲小説久遠陀羅尼は其三を讀みたり予其一及其二を讀まず、且つ未だ完結せざるを以て詳細に之を評するの失禮なるを知る、思ふに此れは宗教家庭小説として鐵骨生君の所謂覆面せるものには非ずや、果して然らば鐵骨生君も亦軟文學にも能あるの人なり、唯予の見る所は君の主觀的文藻に富みたる其筆が何故に客觀的に筆を下さざりしかを惜む、斯の如き想を客觀に描かんには如何に讀者をして一層快感を引かしめしか、さりながら主觀的文藻に富みたるは君の特色ある所にして即ち其小説をあましめし所以なるべきか其一二を讀み尙ほ以下を讀み其仔細に入りて妄評を試むるの時あるべきか、▲以上諸君の璧玉の文辭に對し敢て妄評せし罪則ち死に當る、多謝々々

(小生讀むて精一耶と稱せし所、滑稽新聞に披露せしが如く非國民新聞の猪一耶君と同名なるを忌み過般格助と改名せり)

▲備前和氣町顯本淑女講 昨年三月山本容廣師本成寺へ轉住己來同地篤信家三木勢治氏等と相圖り同地方に於ける婦人の勸信として淑女講の發達を計り來られし處昨今にては大に隆盛を極め會員五十有餘名(毎會増加中)なりと去る舊

正月の例會は福引の餘興あり尙昨年度皆勤者たる中島婦佐三村富代の兩女子へ念珠一連づ、賞與あり山本師は目下日蓮聖人御一代の御事跡を口演せられて信念の助長となされつゝ、あり妾等講員一同隨喜信順すと同地より報道のまゝ、

岡山通信

昨年十二月廿日、山崎町本行寺に篤信會の大演説會を開催す、辯士及び演題は

- 開會の辭 幹 松崎 成事
- 日蓮上人の國家觀 梶木 日種
- 國体の妙解 能 仁 事
- 戰國の宗教 松崎 成事
- 本年一月十日、午後七時より、同所に開會辯士演題
- 開會の辭 幹 松崎 成事
- 日蓮上人の倫理觀 山本 容廣
- 平等と差別 能 仁 事
- 聖日蓮之新論 松崎 成事
- 二月四日、同時同所に開會、辯士演題
- 開會の辭 幹 松崎 成事
- 發菩提心 梶木 日種
- 迷信囃談 能 仁 事
- 厭世教團の女學生の自殺に就て 松崎 成事
- 聽衆青年學生一百餘名「予の法華經觀」施本

京都通信

川崎臥雲報

平和克復の天地に處して吾人の取るべき業務の、いとも多くして而も實の之に伴はざるは、汗顔の至りに絶へず候、然しながら吾人は倦まず、屈せず、一意『我等與衆生皆共成佛道』を期し居り申候、茲に聊か近狀御報道申上候。

▲軍馬追弔法要演説會、嗚呼、人間功成つて馬骨枯る日露戰爭の爲めに斃れたる幾多の軍人は或は國家の干城と仰がれ或は名譽の戦死と云はれ到る處招魂の祭を稟け紀念碑に彫まれ

大阪通信

金山生

遺族は多大の救護金を受く、有難き文明の餘澤ならずや、而も此等勇敢の兵士と苦を共にし飢渴を共にしたる軍馬は之にあづからず也、平等の佛の慈悲は、人も馬も共に佛の御子なるものを稱はれ、茲に吾等臘月十八日本尊に讀經して此等の忠魂を弔ひ夜に入りて例月の演説會に於て吾等が旨意を聽衆に告白致し申候。

▲京都大學青年會、青年は社會の活氣、國家の將來は必ず今の青年に依りて料理せらるゝものにして青年の精神行動の如何は眞に國家前途の盛衰に關係する事多大なり、幾多の教訓を殘して去りたる日露戰爭の結果は吾人をして茲に京都大學青年會を生ましめたり。

昨年十二月大晦日午後七時妙滿寺に於て發會式を挙げし己來入會者百名以上に及び僧侶新聞記者紳士學生商人等各部門の人の集合にして月一回第二土曜に講話會を開き更に進んで雜誌發行の豫定に御座候。

尙意書及規則は後日改めて御報道可申候

▲大和看護婦會、嘗て千葉病院に三ヶ月間病を養ふて看護婦なるものを實地に見たる吾れは其職掌の尤も神聖なるを知ると共に今の看護婦が餘りに其職掌に向つて遠かるに驚きたり病は人世の最大不幸其病人に對する看護婦が斯くてはと期を見てそれが改良を計らんと思ひ居りしが遂に今回同志相依りて月二回の講話會を開き被等に法華經主義の精神教育を施し専ら献身的に病者を看護せしめ社會救済を期する一端に有之申候。

之れ亦後日詳細御報道の期可有之候

一例月の演説會及日書身讀會等例に依りておさゝく怠りなく勤め居り申候勿々

▲諸君は山陽に窪田利兵衛なる熱心なる本宗信徒あるを知り

給ふべし、窪田氏は素直稱派の人會て本多師の説法に感じて轉宗し以來孜孜として護法の任に當れり、先年大坂に來りて工業を營みたる際其職長として雇庸せし灘卯之吉なる人を當時の堺市妙滿寺住職溝口會旭氏に依託し其教化に怠らざりしが其効遂に現れて灘氏今や強熱なる信仰家となれり而して全氏は又溝口氏に中野喜造堺井茂三郎岩佐朋一の三氏を紹介して遂に之をも信得せしむるに至れりと云ふ是れ畢竟するに溝口氏の篤實なる感化に依るべしと云ふと雖も亦諸氏の捨邪歸正の念の篤きに依らずんばならず而して元之を勸告したる窪田氏の益や大、元々之を導きたる本多師の威徳甚盛と云はざる可らざる也、溝口氏更に勉めよや、灘、中野、堺井岩佐の諸氏退信すること勿れ至囑。

安國會の演說會は近來餘り消息に接せず、さりながら時々施本の善舉あり。

清瀬師病癒えて讀書深し臥龍青雲を呼ぶの概見ゆ。

耶蘇教の眞摯なる布教態度は大坂に於て殊に感ずべきものあり、彼等大小數十の會堂には日曜々々彼れが福音を傳へざるの日はあらず、予今更彼れの區々たる教義を評議せず、偏に彼れの熱心なる布教を羨望に堪へざる也。

頃日大阪に一人の風變りものあり、彼れ過去を悔いたる深き心の裡に、更に第二の革新的理想を植へて、纏て高く飛ばんの面魂あり、其名を逸せり(以上)

▲佛教主義新聞雜誌記者相談會(報告) 去月十日午後一時淺草公園傳法院に於て、佛教主義新聞雜誌記者東北三縣飢饉救濟の件に付相談會を催し左の決議をなしたり。

議 決

- 一、各社聯合行動を取ること
- 一、義捐金報告に關する費用は各社自由の意見に任ずること
- 一、主意書の執筆を境野黃洋君に托すること
- 右決議期限十八日迄のこと

人百餘名席を齋し先づ檀家總代は開會の辭を述べ續いて國分大川渡邊諸氏の演說あり軍人の答詞答文等何れも誠實溢れざるなし終りに池澤師は立つて萬歳を三呼し滿場之れに和し皆満足して午後五時解散せり。

▲田井日晃師の奇特 全師は本年師父の年回に相當するを以て其法要を勤修すべく其準備中なりし處今回東北地方の飢饉の狀況を聞知し之が救濟の爲め其法要費を節し本團義金募集の舉あるを幸ひ十金を本團に托して寄贈せられたり又同師は夙に本團の事業を翼賛せられたるに數回本團基礎金中へ寄贈をなし其誠意を表せられたるに今回又々師父菩提の爲めとして金參圓を寄贈せられたり唯己れあるを知つて法あるを知らず救ふべきの衆生あるを知らず徒らに惰眠を貪る實僧多き末世の今日に師の如きは實に得難き眞僧伽と云ふべし

▲前田日應飛山日甫兩師の功勞 兩師は本團創立以來此聖業を贊助せられ或は擴張に或は集金に多大の勞力を捧られ大に本團の補助をなし多年一日の如く本團の爲めに盡碎せられしは本團の特に兩師に感謝する所なり爾後益本團の爲めに助力あらんとを祈る

▲本誌の改革 本誌は今回内容の大改革を爲し大擴張を計る筈にて目下準備中なり依つて三月發行分よりは其面目を一新すべく從來よりはより多く宗義的に布教的にして平易と成るべしとの事發行期日も從來は後れ勝の處次回よりは期日に刊行せらるべしと讀者諸氏刮目して次號の出るを待て

▲救濟金募集に就て 本團の企たる東北地方救濟金募集に就ては各位より多大の同情を表せられ募集額も追々増大致しまたが尙一層希ふ處は住職諸師に於て檀家信徒を勸誘し義捐の醸出ある様御盡力相願度く布施の行は六度行の第一位にあるものにて佛道實踐の第一歩にあるものと思ひますから此上とも御奮勵御助勢の程を希ひ上ます

- 一、義捐金募集期を三月三十一日として送金額を二月廿八日(第一期)三月三十一日(第二期)の二回に分つ
- 一、本會を佛教新聞雜誌聯合會と稱す
- 一、各宗派管長に訓令を發すること
- 一、義捐金額は一口金五錢以上と定むること
- 一、義捐金募集演說會を三回以上開催すること
- 一、準備費として聯合各社は金壹圓宛支出すること
- 一、委員六名を推舉すること(當選人名左の如し)
- 安藤嶺丸、梶 實順、田中弘之、來馬琢道、關 顯透、高田道見
- 一、事務所を東京淺草區山室町十九番地東光社内に置く
- 一、音樂會を開催すること、し、該交渉委員を來馬琢道、梶實順の二氏に囑托す
- 一、各宗派管長に對し末寺一般へ義捐金醸出の諭告を發せらるる様懇請すること
- 一、顯本法華宗第三教區妙典寺戰捷報恩會 顯本等華宗第三教區千葉縣市原郡富山村小谷田妙典寺は區内に於ても權門中に飛離れて孤立せる寺院にして池澤快整師は多年法務を擔任し大に毒鼓を鳴して骨て改宗者の出でしとあり其後益々熱心に隨力弘通して止まず檀中其他の欽慕募らす一昨年日露開戰の當時は盛んに區内戰捷報恩會を營み夫れより常に寺檀相共に信念を勵まし祈念息ざりしが愈々平和克復となりて檀中及村内には一人の戰死者もなく皆大いに喜び寺檀相計つて本年一月十五日を以て盛大なる戰捷報恩會を執行せり當會は前日より教區内の有志者を招き檀中相集りて準備を調へ凱旋軍人へは夫々招待狀を發せり當日は天氣快晴にして早朝より附近の老若士女傳ひ集り寺内は出商人杯の店を張り市をなして至て賑はしく法要は午前十時に始まり式場は導師石橋氏を始め其他二十名相列り讀經の聲爽かに唱導の音朗なり三須氏は出て報恩の對揚を律し池澤氏は一通の報恩文を奉讀せり斯くて鄭軍なる法要了るや直ちに寺檀共立の祝賀會を開き緇素及軍

統一別刊 (一月廿五日發行)

先更會講師本多日生師述

予の法華經觀

六十頁色刷
一部郵税共
金五錢百部
以上一部金
三錢五厘の
割

本書は宗門の明星本多日生師が近來の大著法華經講義撰筆の翌日に、師が大著によりて新に發揮せられ、新に明晰にせられたる、法華經觀、佛教觀を聞くべく、特に、本會が乞ひ臨時に開會して、その講演を筆記したる者、更に師の嚴正なる校閲を経て、之を流暢平易なる論文体に書き綴りしものなり二千頁の大冊二百日の執筆になれる法華經講義の眞髓は實に結晶して本書に現れたり、師の大著を讀まんものも、讀まざるものも、必ず本書を購ふて師が一世に秀てたる大識見に接せよ

施本用として尤も適當なり、前金にて至急御申込あれ

「統一」讀者にて本書希望の方へは端書にて御申込次第御送付致候代金は購讀料御送付の御御送付あれ

先更會

東京下谷日暮里二番地

論 達

客歲宮城岩手福島三縣ニ於ケル凶歉ハ非常ノ慘劇ヲ極メ刻下
降雪ノ期ニ際シ餓死スルモノ相次キ其慘狀見ルニ忍ビザルモ
ノアリ當局及ビ有志之ガ救濟ノ策ヲ講ジ況ク窮民ノ飢餓ヲ救
ハントシ或ハ義捐ヲ募リ小學教科書募集等ノ舉アリ茲ニ本
宗ハ之ガ救濟ノ爲メ統一團ヲシテ義捐ノ募集ヲ爲サシムル
救濟ノ一端ヲ盡サシメントス仍テ宗内僧侶ハ各自應分ノ義捐
ヲ爲スハ勿論檀信徒ヲモ精々勸誘シ其義助ヲ爲サシムベシ
右訓諭ス
明治三十九年二月一日

顯本法華宗管長 大僧正 本多日生

宮城岩手福島三縣饑饉救済に付義捐募集

東北三縣下饑饉の慘狀は新聞紙に依て報道せられ既に一般人
士の知悉せらるる所なり然も其慘狀は吾人想像の外に出で最
も甚しきに至りては米穀の收穫皆無にして中流以下の人々
草木の葉又は櫛の實等を以て僅に飢を凌ぎ漸く其生命を維
持するに過ぎず今や時正に嚴寒に際し降雪連日食の求むる所
なく徒らに死を待つ状態にして各地方應之が救済に力を盡
せりと雖も而も尙ほ其手及ばずして困憊死に至るもの頻々と
して相次げりと言ふ之を聞いて黙過するは同胞の情忍びざる
なり佛陀大悲の洪範を宣傳せる本團は茲に同情に厚き諸氏に
訴へ金錢物品何れに拘らず應分の義捐を稟け之を一括し各地
方廳に送付し窮民救助の一端に資せんとす諸氏幸に本團の微
衷を酌み多少の義捐あらんことを希ふ

東京市淺草區南松山町四十五番地

明治三十九年二月 統一團

義捐金募集規定

一義捐は金錢物品何れにても差支なし
一義捐は三月三十一日を以て締切とす
一義捐は宮城縣十分の五岩手縣十分の三福島縣十分の二の割合を以て分配す
一義捐者の芳名は統一團上に掲げて別に領收票を發せず

Table with 3 columns: Donor Name, Amount, Total. Includes entries like 吉田義着殿 金五十錢, 山田誠心殿 金十錢, etc.

大僧正 本多 日生 師 著

法華經講義

目次
◎序説第一章 緒言第二章 法華超勝の教義第三章 諸種の法華經觀第四章 天台の法華經觀◎第一節
三種教相の綱格◎第二節十雙權實の巧釋◎第三節六重本迹の大意◎第四節三法々鉢の解釋◎第五節待絶二妙の解
釋◎第六節一念三千の妙觀◎第五節 日蓮の法華經觀◎第一節本化別頭の教相◎第二節但令用實の活斷◎第三節
應身常住の妙義◎第四節佛界緣起の妙旨◎第五節究竟圓慈の活釋◎第六節聲色爲經の真義◎第七節唯一本尊の光
顯◎第八節信念成佛の要道◎第九節兩善一貫の活論◎第十節台當教相の異目◎第十一節身讀法華の壯觀◎第六章
天台講經の要義◎第一節四教五時の統釋◎第二節五重玄義の妙解◎第三節法華釋經の科段◎第四節悉檀運用の
活釋◎第五節文々四釋の廣解◎第七章 日蓮講經の要義◎第一節日蓮上人の學風◎第二節本化獨特の五玄◎第八
章 法華傳譯の概略

◎釋文◎科段◎來意◎大意◎入題◎文々解釋◎通解◎妙解◎異解◎批判◎質議◎解決◎字義◎參考◎讚唱
妙法華經は佛教教義の帝王なり亞細亞文明の樞軸なり世界群籍の寶典なり古今の哲匠苟も一宗一家を立てしものにして曾て
對法華經の見解を有せざりしは互に嬋妍を競ふてそが龍賁虎鬪の論戰は實に佛教史上の一異彩なり苟も佛教を知らんと
ならば須く先づ法華經に來るべし百年大藏に没頭せんよりは一日法華を研鑽するに若かざる也。曾て天台智者釋經に心血を
注ぐあり爾後の釋書は言ふに足らず更に日蓮上人は本化別頭の教觀を開示して妙經の統歸を示し給ひぬ。法華を學び法華を
轉じ法華を信じ體達せんとするもの佛教の人身觀宇宙觀道德觀佛院觀等に就て正知正見を得んとするものは必ずや天台に鑒
み日蓮に學ばざるべからずこれ本書の起る所以にして。著者は多年法華經の奥旨を專攻してその學道統を傳へその見稟承あ
り日蓮上人を忘れたる從來幾多の註書に慊らず即ち廣く三國の諸家を參照しうか藎藎の妙義を傾倒して今茲にこの著あり。

和裝帙入全八冊紙數凡一千八百頁
洋裝背角皮全二冊紙數全 上
定價參圓八拾錢 小包送料貳拾錢
出來期限 明治三十九年四月一日

序説には法華經の研鑽に關する重要な教義を排列して一々之に詳解を下し法華全部の科段に就ては圖示を掲げて一目瞭然たらしめ卷首には品々の要義を抽出し入文解釋には來意釋題綱領に就て記述するのみならず文々句々には一々詳解を施し通解異解、批判、質議、解決、參考、字義、妙解、讚唱等の科を設けて親切丁寧に記述せられたれば深固幽遠無人能到の大寶典もこの著により初めて内外の僧俗を導きて等しく妙處に到らしむるを得ん而かも行文流麗、字句平易、文章通俗にして何人にも解し得らるべく務められたるは著者の意を用ひられし所なり故に本宗僧侶信徒は勿論苟も指を佛教に染むる者は必ず精讀すべきの良書なり。

豫約者諸彦へ謹告

法華經講義出版ノ儀爾來取急キ居候モ著者ノ熱心ナル記述ハ豫定ヨリ増スコト約四百頁ニシテ實ニ一千八百頁餘ノ大著作ト相成リ且一時的ノ著ニアラザレバ四回已上嚴密ナル校正致サレ爲メニ印刷漸ク半ニ至ラズ依テ今回活版所ニ特別ノ方法契約致來ル三月二十日必ズ全部完成十日間製本ニ費スモ全末日發送相成候事ニ取定メ候茲ニ事情ヲ陳ベ偏ヘニ御寛容ヲ仰ギ候何卒御諒察給ハリ度又今回裝釘ヲ和洋兩様ニ致シ候ニ就テハ豫約者諸君ニシテ洋裝希望ノ方ハ前以テ御申出相成度候何等御申出無之分ハ凡テ和裝ノ分發送可仕候敬具
追テ出版發行ニ關スル事務ハ統一團へ御照會相成度候

發行所

- 東京市淺草區南松山町
三條上ル
京都府上ル
東京市京橋區南傳馬町三丁目 泰文社
東京市京橋區南傳馬町二丁目 須原屋
東京淺草區廣小路 淺倉書店
東京麻布區飯倉町 森江書店
- 統 一 團
村上勘兵衛
- 東京荏原郡池上村日宗新報社
京都木屋町二條貝葉書院
大阪東區安土町四丁目吉田書店

腦脊髓 精神病 帝國腦病院

東京市神田區和泉町 (電話下谷 七二七)
院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年専門學研究の爲め獨逸へ留學卅六年同大學卒業尙進て英佛専門病院を視察兩院にて診察す

精神病 専門 青山病院

東京市青山南町 (電話新橋三六四五)

本郷 眞泉病院

(電話下谷四三九)

- 婦人科産科 醫學博士 千葉稔次郎
醫學士 中島襄吉
醫學博士 野村華造

基礎金領收報告

一金貳圓也 大阪市 和井田寛再殿
一金參圓也 (爲師父菩提) 東京市 田井日晃殿
右本團基礎金中へ寄贈相成正に領收候也
三十九年二月 統 一 團

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢 十二冊前金六十五錢 郵券代用は一割増但五厘切手を可と
一諸讀申込の節は住所姓名を附書にて認めらるべし

廣告料	一頁半	四角ノ一頁	特別廣告
拾圓六圓	三圓五拾錢	十五圓ヨリ	廿五圓マテ

明治卅九年二月十五日印刷發行

- 發行人 井村恂也
編輯人 山根顯道
印刷所 鈴木暉學
北澤活版所

發行所 統 一 團

東京市淺草區南松山町四十五番地

統

本誌の特色

本誌は全國鐵道の停車場に備置
きあれば其廣告は全國の公衆一
般に知らるゝ便宜あり

